

優秀賞

変わらない場所

茨城県立土浦第一高等学校 2年 海老澤 仁華

そうそうと流れる水の音。鳥のさえずり。澄んだ空気。心落ち着く空間。私が久々に来たこの場所はいつもと変わらない景色だった。

「散歩でも行くか。」

母に連れられて向かった偕楽園の吐玉泉。高校受験を前にした夏の事だった。成績が停滞し、志望校を決めかねていた私は大きな壁にぶつかっていた。ひとり気持ちばかりが焦っていた。忙しいからと一度は断つたものの母は無理に私を連れ出した。

偕楽園は日本三名園の一つだが、私にとっては家族との散歩道であり、学校の友人と学びの時間を過ごしてきた何気ない思い出のつまった場所だ。「やっぱり気持ちちが落ち着くね。」

母の一言になんでこの時期に、とイライラしながらも確かに吐玉泉の水の音が私の心を段々と落ち着かせていくのを感じた。

「ほら、そこばかり見ていないで」

と母は笑う。開園から百八十年近く滾々と止まることのない泉声。その脇には樹齢八百年の太郎杉が静かにそびえ立つ。ただぼんやりと見ていた吐玉泉から顔を上げ大きく息を吸うと、鬱蒼とした木々は光を浴びその光が私の足元まで届いていたことに気がついた。

地元を離れ視野を広げられる学校に挑みたい気持ちはあったものの変化を恐れ、多くの友達が共に目指す学校へ行く選択肢も捨てきれず決断が出来ずにいた私。その事を母は見抜いていたのだろう、だからこの場所に連れてきてくれたのだ。

幼い頃から聞いていたこのせせらぎが私の背中を押してくれる。鳥のさえずりは私の応援歌のように聞こえる。大きな太郎杉が私を見守ってくれている。きっとこれからも。

同じ場所を見ていたら、同じ場所に留まっていたら気がつけない事がある。私の心は決まった。あの日の決断を私は後悔していない。

いつもと変わらないあの音、あの場所が私の壁を越えさせてくれたのだ。